



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外. 京大広報 2004, 0404n: 1691-1702

ISSUE DATE:

2004-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196509>

RIGHT:



京大広報

号外

2004. 4

目次

〈入学式〉

学部入学式における総長のことば……………	1692
大学院入学式における総長のことば……………	1695

〈大学の動き〉

平成16年度学部入学式……………	1698
平成16年度大学院入学式……………	1699
平成16年度入学者選抜学力試験の結果……………	1701
名誉教授称号授与式……………	1702



平成16年度 入学式



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

入学式

学部入学式における総長のことば

平成16年 4 月 7 日

総長 尾 池 和 夫

京都大学に入学された、2,987名のみなさん、入学おめでとうございます。ご列席の元総長、名誉教授、副学長、各研究科長、学部長、教職員とともに、心からお祝い申し上げます。入学するまでに、みなさんはすでにさまざまな道を歩んできたでしょう。今日この式場におられるみなさんの一人一人が、静かにそれぞれの道を心の中でたどっておられることでしょう。また、ご家族の方々も、学習の支援を通して、それぞれの思いをいだいておられることと存じます。長い間の努力が報われた実感を持って、ここに列席しておられることと思います。

みなさんが入学したこの大学の「京都大学」という名がはじめて使われた記録は、1891（明治24）年8月に作られた「京都大学条例」であろうと言われます。そして1949年5月31日に新制の京都大学が設置され、また今年4月1日に国立大学法人京都大学が設置されましたが、その法人は直ちに第3番目の「京都大学」を設置しましたので、この京都大学という名前は変わらないのです。

みなさんは、今日、京都大学の入学式に主役として登場されました。みなさんは、京都大学を受験するにあたって、おそらく京都大学の基本理念を読まれたことと思います。その基本理念に沿って、私は、今日入学式に臨まれたみなさんに、3つのことを話したいと思います。

まず、第1は、学問の自由ということです。京都大学の基本理念の前文には、「創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める」とあります。

1872年に「学問のすゝめ」を福沢諭吉が書いて、慶応義塾出版局から刊行されたとき、たちまち版を重ねて20万部を突破して、いわゆる海賊版が出回る



ほどの人気であったといわれます。学問や知識の習得の意義、西洋の学問に迎合せず批判的に本質をまなぶことの意義が述べられました。

学問の自由とは、国民がそれぞれの領域で自由に研究し、知識を学問以外の政治的、宗教的権力や権威による制約をうけることなく表現する権利をいいます。日本国憲法23条では、「学問の自由は、これを保障する」とされ、さらに教育基本法2条によって教育の基本方針とされているものです。

学問の自由の考え方がしっかりできたのは、19世紀のフランクフルト憲法「学問およびその教授は自由である」だと言われますが、20世紀の西洋でも、学問の自由が侵害される状況がありました。アメリカ合衆国でも、20世紀前半に、学問の自由は危機に瀕したことがあります。公立学校で進化論を教えるはならないという州法で教師が有罪とされた事件がありました。さらに第2次世界大戦後にも、教育や研究に従事する人が誓約をもとめられる状況がありました。

日本では、帝国大学令に、大学は国家の必要に応じる学問の研究・教育をする機関だと規定されていました。1913年、京都帝国大学で、総長が学内改革を主張した7人の教授を辞職させ、これに反対した教授会が、学部の教授人事に関する自治を確認させた、沢柳事件がありました。京都大学の基本理念、「京都大学は、学問の自由な発展に資するため、教育研究組織の自治を尊重するとともに、全学的な調

和をめざす」とありますが、これは、大学の100年の歴史の中で、多くの貴重な議論の積み重ねから確立してきた尊い内容なのです。

第2は、人権を守るということです。人権は、個人が無条件にもっている社会生活の上での権利で、憲法や法で守られているものです。

基本理念には、「京都大学は、環境に配慮し、人権を尊重した運営を行うとともに、社会的な説明責任に応える」とあります。

人権は、人に生まれながらにそなわる固有のものであり、他の者によって侵されてはならない不可侵のものであります。

みなさんの手元には、「自由で平等な社会をつくるために－人権関係法令等資料集－」が配布されています。それには、同和問題をはじめ、障害者問題、女性問題、人権・民族問題などの人権問題に関する理解を深めるため、ぜひ読んでほしい資料が収められています。また、附属図書館などにも、同和・人権問題の文献や資料を備えてあります。ぜひこれらを積極的に利用していただくようお願いします。

国際連合で1948年に採択された「世界人権宣言」、66年に採択された国際人権規約、すなわち「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」（通称、A規約）と「市民的及び政治的権利に関する国際規約」（B規約）、および「市民的及び政治的権利に関する国際規約の選択議定書」が人権に関して国際的に定められた代表的な規約です。この国際人権規約を、日本も1979年に批准しています。

これらのほか、日本が批准している、難民条約、人種差別撤廃条約、女性差別撤廃条約、子どもの権利条約など、たくさんの条約が締結されています。

これから、大学に学び、世界に向かって活躍を始めるみなさんは、ぜひこれらの人権に関する条約に目を通して、その意味を自ら考えておいていただきたいと思います。そして、一人ひとりの人権を尊重して行動できるよう、理解を深めていってほしいと思います。

第3は、地球と人の共存を生き方の基本とすると

ということです。このことは京都大学の基本理念の前文にある、「多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献する」ということに関わります。

みなさんはこれから、共通教育科目を選択しますが、ここで専攻外の分野を幅広く学ぶことが大切です。地球の環境に関することは、全学の学生のみならずにも、一度は触れてほしい分野であります。京都大学には、フィールド科学教育研究センターが、2003年4月に創立されて、新しく活動を開始しました。また、霊長類研究所や地球環境学堂・学舎があります。総合博物館にも、附属図書館にも、また、2004年4月に衣替えした東南アジア研究所や生存圏研究所にも、地球環境を考える分野があります。それらのどこかで、地球と人の共存する未来を考えてほしいと思います。京都大学でのこれらの研究から京都大学が「人と地球のインターフェイス」と言えるように研究を進めたいと思っています。

また、京都大学では、22の21世紀COEプログラムが現在実施されており、その他にもさまざまな重要な研究プロジェクトが、学部を横断して実施されています。その中にも、地球のことを考え、地球と人の共存を考える多くの課題があります。また、課外活動にも、その分野の活動があります。

地球環境に関して、専門分野に進んでいくプロセスを考えてみましょう。例えば生態学の研究です。京都大学には生態学を研究する多くの研究室があり、フィールドがあります。マレーシアのサワラク州には、かつて生態学研究センターにいた故井上民二教授たちが計画した熱帯雨林の研究拠点ががあります。井上先生が考えた、その、サワラク林冠生物学プログラムが実現した研究フィールドの一部が、京都大学総合博物館に展示されています。熱帯林には、地上70メートルにも達する、大変発達した林冠構造がありますが、そこに接近する方法がなかったため、熱帯雨林での動物や植物の相互作用の研究ができていませんでした。井上先生たちは、タワーを建設し、樹上に吊り橋を巡らすなどの工夫をして、花を咲かせるさまざまな植物と、その花粉を運ぶ昆虫などの

生態を調べることを可能にしたのです。

また、京都大学人間・環境学研究科に相關環境学専攻があります。そこに生物環境動態論を担当する加藤 真教授がいます。加藤先生は1980年に京都大学農学部農林生物学科を卒業した若い教授です。

加藤先生のウェブサイトの紹介には、キーワードとして、生態系、共生、進化の3つの言葉が並べてあります。これらの言葉の一つひとつ、あるいは、それらの組み合わせが持つ意味を考えてみていただきたいと思います。加藤先生の研究テーマの紹介には、「自然には、生物多様性と生態系機能という二つの重要な側面がありますが、自然の保護、すなわち生物多様性と生態系機能の保全のためには、このような生物の種間関係のネットワークを守るという視点が非常に重要です。森林、草原、湿地、河川、河口、干潟、砂浜、藻場などさまざまな生態系を、そこに見られる生物の種間関係を紐解くことによって理解し、それを守るために役立てたいと考えています」とあります。このような説明を理解するためには、まずこの先生が書いた入門書を読むのがいいと思います。例えば、「日本の渚－失われゆく海辺の自然」という本です。岩波新書にあります。

その次には、加藤先生の論文を探します。例えば、自然科学系の学術誌としてその地位を確立している、Nature という雑誌から、あるいは、専門分野の学術誌、Global Environmental Research という雑誌から、

加藤先生の論文を検索してみましょう。

その上で、加藤先生の全学共通科目の授業をとります。さらに、専門科目を受講し、大学院修士課程に進み、大学院博士課程に進学して、相關環境学特別研究に従事します。例えば、このような興味を持ち方で、将来の研究テーマを見つけることもできることでしょう。

このようにして、4年後に京都大学学士、6年後に京都大学修士、9年後に京都大学博士という学位が授与されます。長いようですが、一所懸命学習や研究をしていると、あっという間に経ってしまう9年です。

京都大学には約107年の歴史があります。その歴史の続きに、何枚書いてもらってもいい、真っ白いページが無限に用意されています。京都大学の歴史に新しいページを書き足すのは、今日のこの入学式に参加された皆さんです。そこにどのような歴史を皆さんが書き足されるかを、私たちはいつも注目しています。無限の可能性を持つみなさんの、これからの活躍を楽しみにして期待しつつ、私の式辞の結びとします。

入学おめでとうございます。



大学院入学式における総長のことば

平成16年 4 月 7 日

総長 尾 池 和 夫

京都大学大学院に入学した修士課程2,268名、専門職学位課程232名、博士後期課程1,013名のみなさん、入学おめでとうございます。ご列席の元総長、名誉教授、副学長、研究科長、学舎長、また京都大学のすべての教職員とともに、心からお喜び申し上げます。

大学院の修士課程では、これまでの学習課程での蓄積に合わせて、さらに基礎的な知識を補うための授業を受け、研究のために必要な技術を身につける実習を行うことになります。博士後期課程では、講義を受けることは少なく、研究計画遂行の仕事が中心となるでしょう。それらの成果として論文を書き、学術誌に投稿する、あるいは本にまとめるというような発表のための仕事が続くことでしょう。

専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために、理論と実務との橋渡しが重要な課題とされており、みなさんは新しい教育課程の中で学習を重ねて、国際的に活躍する人材として巣立っていくことになることでしょう。

京都大学には約3,000人の教員がいます。また、みなさんの周りには、多くの諸先輩の大学院生がいて、それぞれその専門の分野で先端の研究を行っています。ある場合には、講義という形で、あるときには先生や先輩との議論を通じて、みなさんの研究や学習が進んでいくことになります。また、あるときには自らの注意深い観察によって、先輩からの知識や技術の伝達が行われ、あるときには、孤独な試行錯誤の連続によって、研究に必要な準備や解析が進み、また実務に必要な経験が蓄積していくことでしょう。

研究テーマの設定の問題を考えてみたいと思います。20世紀には、「欧米のキャッチアップ」、つまり欧米に追随する仕方、日本が科学や技術の発展を



とげたことに対する批判がありました。しかし、自分が物事を始めるときに、真似から始められるというのは、見方によっては、人類の持つ才能の基本かもしれません。

明治の改革でも、和魂洋才という言葉で表現される出来事がたくさんありました。また、もっと昔では、和魂漢才と言われ、日本では大陸からの文化や文明の伝達が見られました。中国でも同じような考え方がありました。私自身の分野では、中国の専門家が、1975年に世界で初めて大規模地震の予報を成功させたとき、中国での地震予報の方法論の説明に、専群結合、土用結合という標語がよく使われました。これは専門家と市民の知識を融合し、古来の知識と西洋の方法論を融合するという意味でした。

西洋に学んで追いつこうという考えは、江戸時代から明治にかけての日本の自然科学の分野にも盛んに見られました。植物分類学や解剖学や、工学や理学の多くの分野にそのような考えがありました。

2003年12月2日の京都新聞に、「解体新書」眠っていた、初版本の全5巻、京教大で発見、という記事が出ました。「解体新書」全5巻が、京都教育大付属図書館で見つかり、公開されたという記事の内容に私も驚きました。奥付の表記などから、国内では20部前後しか残存しない初版本と見られるということでした。国立大学法人化に向けて蔵書を整理していて発見したそうですが、法人化は膨大な仕事を大学

に持ち込んで研究の進展を妨げる出来事だと思って
いた私は、こんな形で法人化が役に立つとは思って
もみませんでした。

日本最初の本格的洋書翻訳書である「解体新書」
は、本文4巻と図版（解体図）1巻からなります。
1774（安永3）年に刊行されました。それ以来た
くさんの蘭学者が育ち、江戸時代後期には蘭学の
大きな流れがありました。杉田玄白たちが考えた
用語である「軟骨」「神経」「門脈」などが、
今でも使われており、後に宇田川玄真や大槻
玄沢たちが改訂した「腓臓」などの用語も
今でも使われています。

江戸時代、宇田川家3代にわたる業績は、
西洋の科学を、広い分野にわたって日本に
伝えるというものでありました。多数の翻
訳や著書による普及の効果は明治時代
になって具体的に現れたと言えます。
近代日本の学問の発展を促すも
とになりました。

宇田川榕庵は、1822（文政5）年に、
近代植物学の概要を紹介する「苦多
尼訶（ほとにか）経」を著しました。
ボタニカ（Botanica）は、「植物学」と
いう意味です。

私の部屋にこの「苦多尼訶経」の複製
があります。静岡県の書家で植物愛好
家の福島久幸さんが、写経の心で書
写された貴重なものですが、琵琶湖博
物館に一組、本学の理学研究科植物学
教室と薬学研究科にも、それぞれ一組
を寄贈していただきました。

シーボルトは、来日して3年後に、
江戸で宇田川榕庵と対面し、彼の語学
力と科学知識の豊富さに驚いたとい
います。別れるとき榕庵はシーボルト
に日本の植物葉をたくさん贈り、シー
ボルトは植物学の原書と顕微鏡一台を
贈りました。早稲田大学図書館所蔵
貴重資料の「伝宇田川榕庵使用顕微
鏡」というのが、このとき贈られた
ものではないかと推定されています。

宇田川榕庵は、さらに、1837年（
天保8年）から没年1847年（弘化4
年）にかけて、日本で初めての化学書
である「舎密開宗（せいみかいそう）」
（内篇18巻、外編3巻）を江戸で刊
行しましたが、榕庵が訳した「細胞」
「水素」「窒素」「酸素」などの訳語
は、今もみなさんがそのまま使っ
ているものであります。

このようにして、学ぶということから
近代の日本の学問が進んできました。
みなさんの一人ひとりが、やはり同
じように学ぶということから学問の道
に入っていくことと思います。そして
学ぶ中から、自分自身の取り組む道
を見つけだしていくことと思います。
テーマを設定したら、その分野で今
までに得られている研究成果をすべ
て学んで、そこから未知の世界への
入り口を見いだしていただきたいと
思います。そして見つけた道をまっ
しぐらに進んでください。

職業としての研究者を志すとき、
国が示している方針や、世界の動向
を見極めているということも必要で
す。今、日本の国の科学技術基本計
画の基本理念には、科学技術創造立
国として目指すべき国の姿と総合戦
略の理念というのがあります。科学
技術を巡る情勢の分析から、20世
紀の総括として、科学技術の目覚
ましい進歩をあげ、21世紀の展望と
して、科学技術は社会の持続的発展
の牽引車、人類の未来を切り拓く力
としています。そして、目指すべき
国の姿を、「知の創造と活用により世
界に貢献できる国」として描いてい
ます。具体的な施策として、例えば、
ノーベル賞受賞者を50年で30人に
というようなことも言われました。

その中で、研究開発投資の効果を
向上させるための重点的な資源配
分、世界水準の優れた成果の出る
仕組みの追求と、そのための基盤
への投資の拡充、科学技術の成果
の社会への還元の徹底、科学技術
活動の国際化などが謳われ、国家
的・社会的課題に対応した研究開
発の重点化として、ライフサイエ
ンス、情報通信、環境、ナノテク
ノロジー・材料があげられました。
先見性と機動性をもった確に
対応という項目には、ナノテクノロジー、
バイオインフォマティクス、シ
ステム生物学、ナノバイオロ
ジーがあります。

地域における科学技術振興のため
の環境整備に、知的クラスターの
形成があり、京都市と京都大学の
桂キャンパスなどを中心とする連
携も進んでいます。

科学技術基本計画を実行するに
当たっての総合科学技術会議の
使命には、資源配分の方針、国家
的に

重要なプロジェクトの推進、重要施策についての基本的指針の策定などがあります。

このような政府の審議や方策の議論にも、みなさんは研究者として耳を傾け、とくに次の世代の研究を担う人材として、批判的な精神を持って分析し、自分の意見をしっかりと述べていく必要があります。

基本政策にある、安全・安心な社会の構築は、研究者にとっても重要なテーマです。基本政策にあるとおり、目指すべき安全・安心な社会のイメージを明確にすることが必要です。また研究室での自分自身の実験や解析の場でも、安全をまず基本としなければなりません。国立大学の法人化は、このような安全対策に関して適用される法律も変わるという根本的な変革であり、先輩たちとともに研究の場の安全に細心の注意を払っていただきたいと思います。

また、個人の意識が支える安全、リスクの極小化による安全、安全と自由のトレードオフというような重要なことが指摘されています。それらもよく読んでおくことをすすめます。

自然災害であっても、専門家の持つ知識や情報と、市民の持つ知識と情報が、共有されていることが大事です。地震や洪水は規模の大きな災害ももたらすことがあります。その災害の内容を市民が納得できるかどうか大切なポイントだと、私はある市民から言われて、なるほどと思ったことがあります。

そして、市民に対する説明責任ということも考えてみたいと思います。

科学の世界では真理を探究することを目標としますが、当然ながらデータを得るために道具を使います。その道具は、分野によって大変高額のものである場合があります。経済的に充分な力を持つ国でないと実現できないものがあります。しかも、その支出が国威発揚のためでなく、人類の福祉のためでなければなりません。

例えば、陽子の崩壊を観測するためのスーパーカミオカンデは、2001年11月にセンサーが破損して20億円ほどの損害となりました。このセンサーをさらに巨大化する構想があり、それには400億円ほどが

必要といわれています。また、ハワイの望遠鏡「すばる」の建設にも、400億円ほどが必要でした。粒子を衝突させる実験を行う加速器では、東海村の計画で1,900億円です。ヨーロッパ合同原子核研究所の持っている加速器は2,000億円であります。

これだけの経費の支出で得られる研究成果は、いったいどんなものなのか。科学者は税金を払っている人たちに、それを説明しなければならないのですが、この説明がものすごくむずかしいのが普通です。京都大学でも、社会に向かっていかに正確で詳しい情報を発信するかを考え、実現していかなければならないのであります。みなさんの研究でも、どんな分野であっても、その内容をいつも市民に説明しながら遂行するという習慣を身につけていただきたいと思います。

大学院で、みなさんは研究成果をあげるということを、当然の目標として想定するでしょうが、それとともに、自分の視野を広げ、人格を磨き、社会のいろいろな分野でのオピニオンリーダーとして活動ができる人材になることを心がけてほしいと思います。

研究者を志すのとはちがって、高度専門職業人としての道を志す方々もおられますが、いずれにしても、大学院においては新しい課題を見つけて学習し、研究し、結論を得て発表するという経験を積むことになります。どんな課題であっても、勇気を持って失敗をおそれず、思い切り挑戦することを忘れないでください。

京都大学大学院でのみなさんの学習や研究の活動が、みなさん一人一人の人生の中で、大きな果実となり、その分野における歴史に残る成果につながることを祈って、また、みなさんが世界を舞台として活躍されることを祈って、私の式辞といたします。

入学おめでとうございます。

大学の動き

平成16年度学部入学式

4月7日（水）午前10時から、平成16年度学部入学式が、名誉教授をはじめ来賓出席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、京都大学交響楽団による式典曲奏楽、

京都大学合唱団による学歌斉唱に続いて、「総長のことば」があり、午前10時30分に終了した。

今年度の新入生数は、次表のとおりである。

学部	入試区分 一般入試 (前期)	一般入試 (後期)	外国学校 出身者選抜	外国人留 学生特別選抜	編入学	学士入学	総計
総合人間学部	112 人	20 人	人	人	人	人	132 人
文学部	193	30		1		5	229
教育学部	42	21			9		72
法学部	304	25	7		9		345
経済学部	208	30	6	12	10		266
理学部	271	30		1			302
医学部	217	31					248
薬学部	72	12		2			86
工学部	858	99		20	17	1	995
農学部	241	69		2			312
総計	2,518	367	13	38	45	6	2,987



平成16年度大学院入学式

4月7日（水）午後3時から、平成16年度大学院入学式が、名誉教授をはじめ来賓出席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、京都大学交響楽団による式典曲奏楽、

京都大学合唱団による学歌斉唱に続いて、「総長のことば」があり、午後3時25分に終了した。

今年度の新入生数は、次表のとおりである。

区 分 研究科	修 士 課 程				合 計
	入学者	外国人留学生 国費	私費	再入学者	
文 学 研 究 科	97 ^人	4 ^人	8 ^人	^人	109 ^人
教育学研究科	45		2	1	48
法 学 研 究 科	28		11		39
経済学研究科	57	7	27		91
理 学 研 究 科	312	4			316
医 学 研 究 科	18	1	2		21
薬 学 研 究 科	80	3	3		86
工 学 研 究 科	629	5	9		643
農 学 研 究 科	293	2	11		306
人間・環境学研究科	151	6	12		169
エネルギー科学研究科	135				135
情報学研究科	184	3	6		193
生命科学研究科	77	1	1		79
地球環境学舎	29	1	3		33
合 計	2,135	37	95	1	2,268

区 分 研究科	博 士 後 期 課 程										合 計
	編入学	外国人留学生 国費	私費	再入学	転入学	小 計	進学者	外国人留学生 国費	私費	小 計	
文 学 研 究 科	5 ^人	1 ^人	3 ^人	^人	^人	9 ^人	43 ^人	^人	4 ^人	47 ^人	56 ^人
教育学研究科	5					5	26	1	1	28	33
法 学 研 究 科	2					2	12			12	14
経済学研究科	8	3	1			12	21	4	3	28	40
理 学 研 究 科	27	1	2			30	129	2		131	161
医 学 研 究 科	4		1			5	9		1	10	15
薬 学 研 究 科	8	1	1			10	26			26	36
工 学 研 究 科	54	7	5		3	69	64	2	4	70	139
農 学 研 究 科	14	4	4			22	70	2	1	73	95
人間・環境学研究科	12	2	1	1		16	59	6	4	69	85
エネルギー科学研究科	2	1				3	10		2	12	15
情報学研究科	9	1	2			12	32	1		33	45
生命科学研究科	7	1				8	40		1	41	49
地球環境学舎	1					1	5		2	7	8
合 計	158	22	20	1	3	204	546	18	23	587	791

区 分 研究科	専門職学位課程			
	入学者	外国人留学生 国費	外国人留学生 私費	合 計
法 学 研 究 科	205 ^人	人	人	205 ^人
医 学 研 究 科	23		4	27
合 計	228		4	232

区 分 研究科	博 士 課 程				
	入学者	外国人留学生 国費	外国人留学生 私費	転入学者	合 計
医 学 研 究 科	156 ^人	5 ^人	17 ^人	1 ^人	179 ^人

区 分 研究科	一 貫 制 博 士 課 程							
	入学者	外国人留学生 国費	外国人留学生 私費	小 計	編入学者	外国人留学生 国費	外国人留学生 私費	合 計
アジア・アフリカ 地域研究研究科	23 ^人	1 ^人	1 ^人	25 ^人	人	1 ^人	2 ^人	28 ^人

区 分 研究科(学舎)	博 士 課 程							
	編入学者	外国人留学生 国費	外国人留学生 私費	小 計	進学者	外国人留学生 国費	外国人留学生 私費	合 計
地 球 環 境 学 舎	8 ^人	2 ^人	人	10 ^人	5 ^人	人	人	15 ^人



平成16年度入学者選抜学力試験の結果

平成16年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の前期日程試験は2月25日（水）・26日（木）及び27日（金）に、後期日程試験は3月13日（土）・14日（日）に実施した。

学部別の受験者数、合格者数及び入学者数等は次表のとおりである。

学 部		(A) 募集人員	(B) 志願者数	倍 率 (B/A)	第1段階 選抜合格数	(C) 受験者数	倍 率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	追加合 格者数	入学者数	
総合人間学部		130人	人		人	人		人	%	人	人	人	人	
	前期	文系	55	200	3.6	192	191	3.5	1	0.5	55		132	
	前期	理系	55	177	3.2	173	172	3.1	1	0.6	57			
	後期		20	366	18.3	321	211	10.6	110	34.3	20			
文 学 部		220									1		223	
	前期	190	629	3.3	627	623	3.3	4	0.6	193				
	後期	30	430	14.3	306	156	5.2	150	49.0	31				
教 育 学 部		60											63	
	前期	40	162	4.1	162	158	4.0	4	2.5	42				
	後期	20	189	9.5	148	106	5.3	42	28.4	21				
法 学 部		310											329	
	前期	300	905	3.0	905	892	3.0	13	1.4	304				
	後期	10	411	41.1	287	108	10.8	179	62.4	25				
経 済 学 部		230									3		238	
	前期	一般	160	573	3.6	573	569	3.6	4	0.7				161
		論文	50	317	6.3	250	238	4.8	12	4.8				50
	後期	20	588	29.4	588	392	19.6	196	33.3	30				
理 学 部		301									1	1	301	
	前期	271	841	3.1	826	814	3.0	12	1.5	271				
	後期	30	882	29.4	869	579	19.3	290	33.4	30				
医 学 部		243									11	2	248	
	前期	213	554	2.6	473	471	2.2	2	0.4	222				
	後期	30	397	13.2	259	155	5.2	104	40.2	35				
薬 学 部		80											84	
	前期	70	244	3.5	243	237	3.4	6	2.5	72				
	後期	10	147	14.7	146	102	10.2	44	30.1	12				
工 学 部		955									6		957	
	前期	857	2,323	2.7	2,322	2,291	2.7	31	1.3	862				
	後期	98	1,006	10.3	806	384	3.9	422	52.4	101				
農 学 部		300									3		310	
	前期	233	670	2.9	670	656	2.8	14	2.1	242				
	後期	67	743	11.1	742	464	6.9	278	37.5	71				
小 計	前期	2,494	7,595	3.0	7,416	7,312	2.9	104	1.4	2,531				
	後期	335	5,159	15.4	4,472	2,657	7.9	1,815	40.6	376				
計		2,829	12,754	4.5	11,888	9,969	3.5	1,919	16.1	2,907	25	3	2,885	

（注）受験者数・欠席率は最終教科のものである。

〔外国学校出身者のための選考の実施結果（外数）〕

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	倍 率 (B/A)	第1次 選考合格者数	(C) 受験者数	倍 率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	入学者数
法 学 部	20以内 ^人	32 ^人	1.6	18 ^人	15 ^人	0.8	3 ^人	16.7%	7 ^人	人	7 ^人
経 済 学 部	10以内	24	2.4	11	8	0.8	3	27.3	8	2	6

名誉教授称号授与式

4月5日（月）午前11時から、名誉教授称号授与式が、百周年時計台記念館において挙行された。

授与式は、両副学長、部局長等の出席のもとに行われ、称号授与のあと、「総長のあいさつ」があり、午前11時50分終了した。

称号を授与された方は、次の56人である。



(氏 名)	(推 薦 部 局)	(氏 名)	(推 薦 部 局)
谷 吉 樹	(農 学 研 究 科)	清 水 慶 彦	(再 生 医 学 研 究 所)
河 野 敬 雄	(理 学 研 究 科)	川 原 琢 治	(工 学 研 究 科)
前 田 達 明	(法 学 研 究 科)	宮 田 隆	(理 学 研 究 科)
森 島 績	(工 学 研 究 科)	今 西 信 嗣	(工 学 研 究 科)
岡 太 郎	(防 災 研 究 所)	小 川 正	(農 学 研 究 科)
足 立 裕 彦	(工 学 研 究 科)	山 口 正 治	(工 学 研 究 科)
宮 本 元	(農 学 研 究 科)	佐々木 克	(人 文 科 学 研 究 所)
佐 藤 公 道	(薬 学 研 究 科)	日 合 弘	(医 学 研 究 科)
上 田 國 寛	(化 学 研 究 所)	辻 文 三	(工 学 研 究 科)
内 田 有 恆	(農 学 研 究 科)	由 佐 悠 紀	(理 学 研 究 科)
大 畠 誠 一	(フィールド科学教育研究センター)	植 村 榮	(工 学 研 究 科)
池 田 浩 士	(人 間 ・ 環 境 学 研 究 科)	奥 村 浩 士	(工 学 研 究 科)
井 狩 彌 介	(人 文 科 学 研 究 所)	則 元 京	(木 質 科 学 研 究 所)
垣 野 義 昭	(工 学 研 究 科)	田 中 二 郎	(アジア・アフリカ地域研究研究科)
飯 塚 忠 彦	(医 学 研 究 科)	牟 田 一 彌	(工 学 研 究 科)
藪 崎 努	(理 学 研 究 科)	村 形 明 子	(人 間 ・ 環 境 学 研 究 科)
中 野 一 新	(経 済 学 研 究 科)	西 本 美 彦	(人 間 ・ 環 境 学 研 究 科)
今 村 正 之	(医 学 研 究 科)	西 田 利 貞	(理 学 研 究 科)
入 倉 孝 次 郎	(防 災 研 究 所)	山 本 直 一	(理 学 研 究 科)
藏 本 由 紀	(理 学 研 究 科)	桑 原 保 正	(農 学 研 究 科)
山 本 有 造	(人 文 科 学 研 究 所)	齋 藤 烈	(工 学 研 究 科)
宮 崎 興 二	(人 間 ・ 環 境 学 研 究 科)	内 海 博 司	(原 子 炉 実 験 所)
足 立 紀 彦	(情 報 学 研 究 科)	小 山 直 樹	(アジア・アフリカ地域研究研究科)
天 野 高 久	(農 学 研 究 科)	伊 藤 靖 彦	(エネルギー科学研究科)
吉 田 起 國	(エネルギー科学研究科)	森 友 彦	(農 学 研 究 科)
茨 木 俊 秀	(情 報 学 研 究 科)	萩 野 文 丸	(工 学 研 究 科)
花 崎 紘 一	(工 学 研 究 科)	清 野 裕	(医 学 研 究 科)
熊 谷 英 彦	(生 命 科 学 研 究 科)	江 島 義 道	(人 間 ・ 環 境 学 研 究 科)